
東方今昔館

守矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方今昔館

【Nコード】

N70730

【作者名】

守矢

【あらすじ】

mixiでやってる妄想と言つ名のショートストーリーを作り直して投稿していきます。

ゆっくりみていってね！

私の名前は！〜memory my name！〜

「ねえ、衣玖……」

私は隣で上品に飲んでる付き人に何時もの口調で話掛ける。

「はい？如何致しましたか？総領嬢様」

「アタシってさ、変わったのかな？」

私自信、多少の変化を自覚してる。だが、どこか心の中では認めたく無いのかもしれない。

彼女の口から言ってもらえれば認められるかもしれない。

「……ご自身はどう思われますか？」

彼女は私の口から言わせたいらしい。相変わらず意地悪な付き人だ。

「そうね……。少なくとも昔より、マシになったかな……」

昔の私は何に対しても苛立ちしか覚えなかった。

その上でその苛立ちを押しさえ込まなかった……。

『総領嬢様。ごきげんよう』

『総領娘様、一緒に踊りませんか？』

『総領娘様』 『総領娘様』 『総領娘様』

「どいつも、こいつも！『総領娘様』！『総領娘様』！『総領娘様』！」

「私は『総領娘』なんて名前じゃないわ！」

私は眼下に自分を認めない『敵』を見下ろしながら一人怒りを露にしていた……。

その頃の私は他人から一人の天人ではなく『総領主の娘』としてしか見て貰えなかった。

その事に怒りを覚えていた。

「総領娘さま。そんな所にお一人で居らず我々と一緒に踊りましょう」

「っー！」

その笑顔がとても醜い物に思え、逃げ出すようにその場から急いで離れていった。

「……ふん。総領主さまの娘だから気を掛けてやっているのに……。」

「やはり、あの娘には天人になる資格など無かったのでしょう。親

の七光り。「不良天人」とは言いえて妙でありますな」

はははっ、と笑う彼らに

「失礼します・・・総領むす、いえ・・・天子様のお話をされていたようですが？」

衣玖が話掛けていたそうだ。

「何かお伝え忘れていらしたのであれば、代わりにお伝えいたしましょうか？」

「い、いや。結構だ・・・」

衣玖の証言だがあの時の奴らの顔はとても笑えたらしい。

「何よ！何よ！何よ！」

「毎日！毎日！食べて、飲んで、笑って踊るだけ！変化の無い日常！あいつ等はここが天国のように見えているけど、私にとっては・・・」

そう、私にとっては

「地獄も同然よ！」

私は怖かった。

彼らと同じように墮ちて何も感じなく、ただ同じ行動を取るだけの生き物なのかも解らない「モノ」になるのが……。

「あゝ！もう！イライラするわ！」

「随分と楽しそうね」

いきなりそう声を掛けられれば誰でも驚くと思わない？

「誰よ!?!」

そう、答えるのが精一杯だった。

そこに立っていたのは、いかにも腹に一物ありそうな胡散臭い女だった

「こんにちは。いい天気ね」その女は私の心情を見据えた上でそう言った。

恐らく、アタシの心は手に取るように解っていたんじゃないかしら？

「何者!?!名乗りなさい！」

他人を前にしたら天人としてのプライドが出てしまうのか、高圧的

な態度になつてしまう。

「あら、人に名を尋ねるときは自分から答えるのが礼儀ではなくって？それとも……」

私は次の言葉を聞いてハツキリと自覚したわ。

「他の連中から『総領娘様』なんて呼ばれて自分の名前すら忘れてしまったのかしら？」

私は『自分』を認めて欲しかった。

『総領主の娘』と言う括りではなく『私』と言う個人を見て欲しかった……」

「そんな事ある訳無いわ！私の名前は！」

「総領娘様……。どこですか？」

いつも、「空気を読んでますから」なんて言ってる割に今回はタイミングが悪すぎだわ……。空気読みなさいよ。

「あらあら。良い従者をお持ちの様ですわね。お名前を伺うのは今度にいたしましょうか。……ああ、そうそう。最後に面白い事を教えてあげる」

「……面白い事？」

その女はさも楽しそうに言った。

「地上には『弹幕ごっこ』と言う遊びがあるの。妖怪が騒ぎを起しやすく。人間が騒ぎを収めやすい
ただの、でもとても面白い『ごっこ遊び』。アナタもお暇なら一度遊びに来ては如何？」

そして、唐突に現れた女は唐突に消えていった。

「総領娘様。こんな所にお出ででしたか……。そろそろ夕餉のお時間です。お戻りください」

衣玖は心配そうにしてくれていたが、その時の私の意識は別の所にあつた。

「ええ、衣玖。直ぐに向かうわ」

「『弹幕ごっこ』……か」

食後部屋に戻ってもその言葉が忘れずにいられた。

「え？何か仰られましたか？」

「いいえ。独り言よ……」

給仕をする衣玖に返すもどんなものか想像していた。

そして、想像するのが段々楽しく、自分もやってみたい。そう思い出した。

「今日と言う今日は許さないからね魔理沙！」

翌日、天界の端っことから下界を覗き込んだら紅と白の巫女服を着ている少女と

「良いじゃねえか。たかが一個位食べたって！」

白と黒のゴシックドレスを着た少女が

「【霊符】 夢想封印！」 「【恋符】 マスタースパーク！」

色とりどりの弾幕が空を彩っていった。その中で二人は踊るように次々と技を繰り出していく。

一つとして同じものが無い。美しい弾幕。

(やってみたい・・・)

純粹にそう思ってしまった。

あの中に入って一緒に踊りたい。

気付いたら、私は宝物庫に来ていた。

「あった。【非想の剣】！お父様こっちに来てから一度も触ってないのね……。凄い埃」

私が手に取ると淡く光りだす非想の剣。

「アンタもここで誇り被ってるのは嫌なんですよ？私が面白い所に連れて行ってあげるわ！」

「下の世界はここみたいに惰性で生きる連中なんて一人も居ない！常に自分の意思を持ち、新しい事を探してる連中ばかりよ！」

何故かどんどん自分の思いが口から出てくる。それだけ懂れているのだろう。あの二人に。あの世界に。

「私が連れて行ってあげる。だから、アンタは私の剣になりなさい！【非想の剣】！」

夜、みんなが寝静まった時。

即興で作ったスペルカードで部屋の壁を吹き飛ばして出る事にした。

「チャンスね。やるわよ、非想の剣！」

「【非想】非非想の剣！」

突如起こった轟音に総領主は飛び起きた。

「何事か!？」

外で待機していた衛兵が守る為に部屋に入ってくる。

「報告します!天子様が宝物庫から非想の剣を持って逃げ出しました!」

「なっ!またあのじゃじゃ馬娘か!今度は非想の剣だと!?!直ぐに連れ戻せ!」

総領主の言葉に部下が困った様に

「それが、天子様が気質を操り外が大変な事になって。対処に追われております!」

「な!?!天子おお!!!」

「ふふ、いい気味。これに懲りたら偶には遊ぶばかりでは無く宝物庫の掃除でもしたらいかが。お父様」

鬱憤を晴らすかの様に天界の天気を換えてやった。暫くは追ってこないだろう」

「総領娘娘様!」

ああ。こいつは違ったか……。

「どきなさい。衣玖」

「何故。この様な事をなさるのですか？」

その顔には怒りでも、焦りでもない。

「つまらないから。ここは毎日が変わらない。ここじゃ私はただの

「総領主の娘」誰も「私個人」を見ない。だから変わるの」

「そうですね……では」

ただ、優しさと言びが浮かんでいた。

「私もお供させていただきました」

「はっ？アンタ……なんで？」

「私は総領……いえ天子様の付き人ですから……」

……ははっ。どうやら私はとんでもなく良い従者を持っていた様だ……。

「お父様にこっぴどく怒られるわね……」

「二人なら半分ですから大丈夫です……」

『ふぶっ……』

「じゃあ、行きましようか！衣玖！」

「はい。天子様！」

「そうして起こしたのがあの異変。後はアンタも知ってるでしょ？」

私の隣にいつの間にか居た胡散臭いあの女。

途中から気付いていたが、あえて無視して向こうも黙って聞いていた。

「随分と楽しんだ様ね」

「ええ。お陰さまで……。実はアンタを探してたのよ」

そう、見つけたら絶対にやってやるう。

「あら、お礼でもして貰えるのかしら？」

「ある意味最大級の礼よ……」

「教えてあげる。あの時言えなかった『私の名前』を！」

今なら言える。

「私の名前は・・・非那名居 天子よ！」

堂々と私の名前を！

私の名前は！〜memory my name！〜（後書き）

まず、最後まで読んでいただきありがとうございます。
読んでいて違和感を感じた方もいるかもしれませんが。

実は私はゲーム（STG東方project）を一切プレイしていません。

なので、2次設定や創作などから独自の解釈の元作っています。

時系列など多々差異があるでしょうがまあ、これも2次創作・・・
と言う事で許してください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7073o/>

東方今昔館

2010年11月4日20時27分発行